

心理学シリーズ 人間嫌い編 <その4>

～ 課外授業・PART ～

2007.3.25 タツノオトシゴ



前回の「子どもの情景」から、はや半年が過ぎ去っています(^.^;
光陰矢の如し、動かざる事山の如し…あれッ??

まあ、お堅いことは言わず、昔を思い出しながら、しばしお相手を…

皆さん、課外授業と云うと何を思い出しますか？

昔の映画の題名を思い出す人は、私と同年代の団塊の世代かもしれません。
お稽古事や、塾、クラブ活動、キャンプなどが、これに当たるのではないのでしょうか。
でも、予備校がこれに該当するとは思えません（授業の延長か、補講ですよ）

子どもの頃、課外授業は新しい事の発見で、ワクワク、ドキドキしていました。
そう、学校という日常から離れ、そこには非日常の世界があるからなんです。
新しい発見と、新鮮な環境との出会いがありました。
人間、そういう環境では、思わぬ才能を発揮できたり、普段以上に頑張れるものなのです。

最近、教育という現場を見ると、教えることが中心になってしまい、自発的に育つ部分
の芽を摘んでしまっているような気がしてなりません。まさに加害授業です。
他の人達と同じことを、早く正確に出来る人が良い生徒で、自分なりのマイペースで、試
行錯誤を繰り返すのは、出来の悪い、要領の悪い生徒の評価しかされません。このような
評価が、世間全体で当たり前になると、個性の感じられる子どもが萎縮し、虐めの対象に
なってしまうという理由が理解し易くなると思います。誤動作の多い機械は、すぐに廃棄
処分され、新しいものに置き換えられていきます。

でも、人間の場合は

どうなのでしょうかね～え？
代わりの人間はいくらでも居ます？

さて、課外授業の話に戻りますと、
「タツノオトシゴが小さな頃、何を
してたの？」ということからお話し
なければなりません。



身体が弱く病弱であったため、高校生まではスポーツの世界にあまり接点がありませんでした。しかし読書の世界に嵌ってしまい、いつも夢の世界を追いかけているような子でした。小学校や中学では、数学や英語が大好きで、絵や体育は苦手だったのを思い出します。今から考えると、はじめから才能がなかったんですね(^_^;

あまりにも絵が下手で、学校でまともな絵を書いて出した記憶がありません。病気で欠席したり、夏休みになると宿題が出ます。その時は、ちゃんと提出し、良い成績がもらえています。(親が見かねて手を入れると、まるで見違える絵に生まれ変わります)



一応、絵の先生について習ったのですが、書くのが嫌で遊んでばかりでした。

書道も習ったのですが、課題を提出するまでにほとんど練習をしません。形だけ出せば良いという程度の、落ちこぼれの生徒です。理由の一つに、「自分が書いたり作ったりするプロセスを人に見られるのが大嫌い!」という我がままな部分がありまして、この性格は今でも直りません。何かをする時、他人がいると意識してしまい、自分を押し殺してしまいます。(この手の子どもが、いじめられっ子になり易いのです)

ピアノも習い、塾にも通い色々なお稽古をしていますが、ものになった例がありません。自発的な部分が無いので当然のことかも知れません。当時は、上達もせず褒めても貰えませんでした。娘二人を見ると、今更ながら「子育てとは難しいこと」と思えるようになりました。



花や樹を育てるのは大変です。ちょっと水遣りを忘れると萎れてしまい、やり過ぎると枯れてしまいます。「親はなくとも子は育つ」の例えのように、外に放り出しておくほうが綺麗な花が咲くように思えます。「可愛い子には旅をさせよ!」とはよく言ったものです。

課外授業で面白いのは、いつも予想しない課題が出てくる事でした。はじめはあまり気が付きませんでした。いわゆる出来の良かった子ども達は、明らかに戸惑いを見せています。普段の成績で上位にいるだけに、人の前で失敗するのを恐れ、なるべく係わらないような立場を維持しようとしているのを見て取れます。ツツノオトシゴは、そんな状況では普段以上の行動力を発揮しています。周りの人間関係がよく分かり、状況の分析が出来たからでしょう。ここで、日常の読書や雑学が役立ってきました。他の子ども達が勉強している間に、読書にふけり大人の知識を吸収していたからかもしれません。そのおかげで、「人の顔色を見る 心理を読む」というベースが構築できたように思います。児童心理の発達過程で、『メタ認知』と呼ばれるものがあります。相手の反応を窺いながら、自分の行動を制御できるようになる為には、子どもが成長過程でしっかりと『メタ認知』の能力を獲得しなければいけません。人間とのかかわりの中で、最近この部分が欠落している人が多くなってきたように感じるのは、私だけでしょうか…？

フランスの心理学者J.ピアジェは認知発達理論の中で、2~7歳位の段階で、「自己中心的」な見方しか出来なかった子どもが7~11歳で客観的に物事を見られるようになることを「前操作期」の段階から「具体的操作期」へと発達していくと捉えています。近年の子どもを見ると、どうも「具体的操作期」の段階が欠落し育った子どもが増えていると思えてなりません。思考よりも先に感情が動くので、「面倒くさい!」「うざい!」という言葉となって返ってきます。他人と会話するのが苦手で、自分の世界に引きこもってしまうのです。気軽に声を掛けることも、身の危険を覚悟しなくては出来ません。



<人間の心を映し出す不思議な樹>

先日、自転車で走っているときに、前から来た自転車に乗った若者が、何かを落としたのが見えました。スピードを落とし、「チョット、何か落としましたよ!」と声を掛けたのですが、「何か用か!うるせえ!」と言いながら走り去って行きました。落としたものを拾い上げると、それはチェーン式の自転車の鍵でした。まあ、別に支障もなさそうなので、警察にも届けず、そのまま近くの樹に吊るしておきました。

髪は金色に染め、耳にピアスをつけたお兄さんでしたが、落としていった鍵にはミッキーマウスの人形の飾りが付いており、ちょっとアンバランスでした。

課外授業で楽しいのは、やはりキャンプです(^^)

本来であれば、川原から石を拾ってきて、かまど作りから始めます。

風の向きを計算し、焚き口の向きを考えたりします。支柱になるY字型の枝を2本選び、固定します。燃料になる枯れ木や干し草を探し、マッチ1本で点火することが基本です。もっと本格的にする場合は、乾いた木をこすり合わせて火を起こす所から始めますが・・・

このような場合、タツノオトシゴは現場での指揮官に早変わり、いつもお手本を示します。普段目立たず何もしない子が、課外授業になると本領を発揮します。ナイフとロープがあれば、色々なことが出来ます。ついでに、ブルーシートもあれば、立派なお家も作れます。遊びやいたずらの中から自然と覚えた事が一杯ありました。料理の基本も、実はこんな所で身に付けたのかもかもしれません。今の世の中、電気が無ければ何も出来ず、電気がない場所で何かをする事は大変です。でも、課外授業の優等生は、電気に頼らず生活する術を身に付けているのでしょう。(アナログ人間の原点です)

でも、火遊びをすると「おねしょする子になる！」ので気をつけましょう(^^;

子どもの世界でも、先輩から教わり覚えていくものが多くありました。遊びだけではなく、勉強や恋愛なども大人の感覚とは違う世界です。

最初は誰でも失敗し、「見よう見まねで学んでいく」そんな時代は過去の遺物になってしまいました。

団塊の世代が大量に退職したあと、技術の伝承が出来ていません。それは、その後の世代とのギャップが大きく、大きな溝が出来てしまったからなのです。



会社の中で、先輩達の技術を受け継いでうまく出世できた団塊の世代、それを傍から見ていた次の世代の人達は、「団塊の世代を排除する」方向に動きました。違う切り口で、別の仕組みを作り上げていったのです。年功序列や談合の世界とは係わりを持ちたくなかったのでしょうか。それが今の時代における、自由化であり、競争原理の導入です。

団塊の世代の前後におけるギャップより次世代における影響の方が大きく出ています。第二次ベビーブームの子ども達と、その後の子ども達は、まるで育てられ方が違ってきています。その辺が、今の日本における大きな社会問題の根底に流れている原因なのです。

次回はいよいよ恋愛編、課外授業・PART- の予定です。